

先進自治体事例紹介②

#	自治体名	講演名
2	富山県下新川郡朝日町（みんなで未来！課）	「公共ライドシェア：ノッカル」から始まる挑戦

【発言要旨】

■ 朝日町の基本情報とスローガン

- 朝日町は「こんにちは、楽しい未来」というスローガンを掲げ、地方創生の文脈よりも前から、町の未来を前向きに描く取り組みを進めてきた。
- このスローガンは、暮らしの中での出会いや楽しみを通じて、次の豊かさを創り出していこうという考え方に基づいている。

■ 官民連携によるまちづくりの方向性

- まちづくりにおいて官民が連携して進めるには「どこを目指すのか」という共通のビジョンが非常に重要。
- 朝日町では、官民が中心となり、地域住民とともに「この町をどうしていくのか」を考え、「こんにちは、楽しい未来」という方向性を共有している。

■ 現在の取り組みの状況

- 子どもたちは登下校時にマイナンバーカードを活用するほか、町内の店舗の約半分（電子決済導入済みのほぼ全店舗）でマイナンバーカードによる決済が可能。
- 高齢者もマイナンバーカードを活用して「百歳体操」などの活動に参加。子どもから高齢者まで、すべての世代がマイナンバーカードを活用し、生活の利便性を高めている。

■ 公共ライドシェア「ノッカル」の導入

- これらの取り組みの礎となっているのが「公共ライドシェア ノッカル」である。
- 国内初の事業者協力型の次世代有償旅客運送

として認定された事業である。交通や福祉などをバラバラにやるのではなく、同じ考え方のもとで地域の学びや福祉など、さまざまな領域を統合的に進めている。交通の枠を超えた地域福祉の基盤となっている。

■ 横断的な政策推進組織「みんなで未来！課」

- 朝日町では、縦割り行政の枠を超えた横断的な組織「みんなで未来！課」を設置。
- 人を中心に据え、福祉・教育・交通・商業などの領域を横串でつなぎ、持続可能な政策を展開しています。
- 朝日町は人口約1万人、高齢化率も高く、行政職員も限られた中で、既存の資源を最大限に活用している。

■ 地方から未来を創るという視座

- 朝日町では「地方から日本の未来を創る」という掛け声のもと、取組を進めている。民間企業にとっても、「町のことをやってくれ」という依頼ではなく、課題を共有しながら一緒に未来をつくる視点が重要。

■ サービス設計の思想

- 朝日町では、サービスの質を高めるために「とにかくお金をかけて最高のサービスを作る」という発想は取っていない。
- コストをかければ何でもできる時代だからこそ、限られた資源の中で、いかに工夫してサービスの質を高めるかが重要。この考え方が、持続可能なまちづくりの根幹を支えている。

- 朝日町では、歴史と哲学を持ってサービスを設計し、持続可能な「楽しい未来」を目指している。

【質疑応答】

■ ライドシェアの運用時間帯の偏りについて、現状どのような状況か。また、利用目的はどのような用途で使用されているか。

- ドライバーの都合に合わせた運用が基本であるが、日中以外の時間帯にも対応可能なドライバーが存在しており、運用の中で柔軟に対応が進んでいる。
- ライドシェアは単独の仕組みではなく、バスやタクシーを含めたワンオペレーション体制で運営しており、選択肢が広がっている。
- 利用目的としては、スーパー銭湯など娯楽施設への移動が多く、ライドシェアがそのニーズに適合している。
- 急に利用がなくなった高齢者がいれば見守りの役割も担えている。地域社会のお互い様の文化が活かされており、都市部ではなかなか難しい要素ではないかと考えている。

■ 博報堂との連携につながった経緯は、どのようなものであったのか。

- 朝日町が消滅可能性都市として課題を抱えていた中で、博報堂が地域支援の一環として訪問し、偶然の出会いから連携が始まった。
- 業務委託ではなく、博報堂側の自主的な提案からスタートしており、企業側も地域課題に向き合う姿勢を持っていた。